

村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

第17回村野藤吾賞

設計者 高橋 誠一

作品名 群馬県立館林美術館

自然と人間のさまざまな関わりを視点とした芸術作品を中心とする収集と展示、そして人びとが直接につくるといふ行為を通してその意味を楽しみながら体得する場となること、この2つを主題とした美術館をつくるという合意を確認することから作業がはじめられた。そして県側からの人たちと中山公男氏、そして設計者が話し合いながら敷地を選定したと聞く。

館林とその周辺の幾つかの候補地の中から、多々良沼公園の域内の場所が選ばれた。第二次世界大戦直後の食糧増産のために沼を埋め立てて農地とした地であった。そして長い年月を経て、そこでの人の生活は消え、草に覆われつくして、茫々たる湿地の自然の地となっていた。眺望が周辺の水田を超えて山々に延びるこの地が敷地となった。

「はじめに箱ありき」ではないテーマをしっかりと持った美術館をつくりたいという話し合いの中から確認した上記の2つの主題に対して設計者は、第一のテーマとして20世紀の初頭の彫刻家フランソワ・ポンポンの動物作品とギャラリーを、第二のテーマに対しては彫刻家のブルゴーニュの生家と風景のイメージに重なるワークショップの場所が構想の中心に発生したと語っている。

北西を豊かに流れる多々良川、南東にのびのびと弧を引く調整池、そして南西の数段のカスケードに囲まれて明るく整備された湿地にアプローチを引き入れる。その中央にやわらかく浮上する芝生広場と彫刻のための第一展示室を中心とする全体が、単純なのびやかさで心地よい美しさをいま見せている。

多々良川に並行して管理、収蔵ブロックが一直線に走り、その前面に独立した彫刻のための第一展示室と、柱のボスク（茂み）に包まれるようなワークショップがそれぞれ独立した2極となって配されている。この2つの対極の間を楕円軌道のように空間が走る。200mを超える長いギャラリーである。この流れは遠くの松の森からゆっくりと加速して流来し、再び森に向かって減速して延びてゆくかのようにも思えた。

第一展示室は、設計者の記憶から消えることのないメキシコの巨匠ルフィヨ・タマヨ美術館の印象がイメージを啓示したのだと語る。この芝生広場の大地の深い地点に頂点を持って立上って開く円錐体を想像し、その上に広がる天空のはるかなところに中心を持つ大球殻の底部の一部で円錐体の上部を切り取っている。大地に深く根を入れて天空に志向する円錐体と空中の巨大な球体の交叉する宇宙観のような想像を、見事に優しさの筋書きの中にまとめているのである。

モダニストとして重ねた60年の建築家の軌跡の到達は、積み重ねてきた精緻な機能と技術の追求とその洗練の過程を超えて、さらに純化した空間の起源への眼差しともいえるものに向かっていくのように見える。

ワークショップ棟は、手の業で優しく積みあげてつくられている。そこに住んで制作に打ち込む作家の内側に生きつづけ、環境に開く原点ともいえる孤独が、生き生きとした手を通して制作を続けている家となっている。その家を柔らかい森が包み込んでいる。

大地と光と風と水、そして建築が透明な感動となって人びとの心に気持ちのよい余韻を与える秀作を見た。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎